

ツツバ語の色彩用語と語彙借用  
ービスラマ語との比較を通してー

内藤 真帆

愛媛県立医療技術大学紀要 第13巻 第1号抜粋

2016年12月



## ツツバ語の色彩用語と語彙借用 － ビスラマ語との比較を通して －

内藤 真帆\*

### Lexical Borrowing of the Color Terms in Tutuba: A Comparison between Tutuba and Bislama

Maho NAITO

#### Abstract

There are more than 100 indigenous vernacular languages on the 83 islands of the Republic of Vanuatu. Most Ni-Vanuatu, i.e., the inhabitants of Vanuatu, speak at least one of these languages, including Tutuba, in addition to Bislama. Bislama, an English-based pidgin-creole, is the national language of Vanuatu. Thus, it also serves as the common language for the speakers of different indigenous languages. Tutuba is one of the vernaculars spoken by approximately 500 people in Tutuba and is considered to be an endangered language.

The present paper will focus on the color terms in Bislama and Tutuba languages. Tutuba language has only five color terms, namely blue, red, yellow, white, and black, whereas Bislama has much more color terms even in comparison with the English language.

In this paper, I will first introduce the differences in the semantic fields of color terms in Bislama and Tutuba languages. Then, I will show how Bislama color terms, such as brown or pink, which are not present in Tutuba language, are borrowed into Tutuba sentences. Since there are only some Tutuba sentences that allow this lexical borrowing, this paper examines the differences between these two categories of sentences.

Finally, the factors behind these lexical borrowing possibilities and the loan regulations in the two languages are discussed by comparing both languages with respect to grammar. Tutuba sentences are also analyzed with respect to syntax, morphology, and phonology.

Key Words: ヴァヌアツ 色彩用語 語彙借用 制約

#### 序 文

南太平洋に位置し83の島々から成る島嶼国ヴァヌアツ共和国では、オーストロネシア語族のオセアニア諸語に属する100余りの現地語が話されている<sup>1)~3)</sup>。国民の多くは、現地語の少なくとも一つとヴァヌアツ共和国の国語であるビスラマ語の両言語を自由に運用することができる。人々は同一の現地語を母語とする者とは現地語を用いて会話をし、異なる現地語を母語とする者とはビスラマ語を用いて会話をする。

ヴァヌアツでは今日、近代化と共に発達した交通手段

によって、異島間の移動が頻繁に行われるようになっていく。こうした都市部への移動および島間の移動は、異なる現地語話者の接点を増加させ、人々の使用言語や現地語に影響を及ぼしてきた<sup>4),5)</sup>。ビスラマ語使用の増加は特に現地語の音声や語彙に影響を与え、これに関しては個別言語における多くの記述が存在するが<sup>6)~8)</sup>、両言語の意味範囲の違いに依拠した語彙借用を対象とした分析や考察はほとんど存在しない。また意味に留まらず、両言語の音韻や統語を比較した上で語彙借用を考察した研究も無い。本論文はこうした先行研究の乏しさを踏まえ、現地語の一つであるツツバ語と国語ビスラマ語の色彩表

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

現に焦点をあて、現地調査により得られたデータを基にして両言語の意味範囲の違いを示す。さらにビスラマ語の色彩用語がツツバ語に借用される場合とされない場合があることに着目し、これが何に依拠するのかを両言語の比較・考察を通して探る。そして音・形態・統語の観点から借用上の制約を明らかにする。

## 方 法

### 1. 先行研究と本研究のデータ

1969年から1974年にかけて、Tryonを含む四人の言語学者がヴァヌアツ共和国の言語や方言を対象に、それぞれの基礎語彙およそ300語を調査した。これを発表したNew Hebrides Languages<sup>3)</sup>には、ツツバ語の語彙の音声表記も含まれており、本書がツツバ語に関する唯一の先行研究である。この基礎語彙およそ300語の中には色彩表現も存在し、黒、緑、赤、白、黄の五つが記録されている。音声表記以外すなわち音素や形態、統語に関する記載はない。

一方のビスラマ語の先行研究としては、Crowleyの著したBislama Dictionary<sup>9),10)</sup>とBislama Reference Grammar<sup>11)</sup>が挙げられる。それぞれが英語で書かれたビスラマ語唯一の辞書であり文法書である。

本論文で扱うビスラマ語のデータは、筆者が2000年から継続的に副都心のエスピリトゥ・サント島と首都のエファテ島の市場で参与観察を行って収集した自然発話である。一方ツツバ語のデータは、筆者が2001年から今日に至るまで定期的にツツバ島で調査を行って得られた発話である。現地では首長家族と寝食を共にし、参与観察により自然発話を収集したほか、一年を通して島の行事に参加し、結婚式や寄合で交わされた会話やスピーチ、また儀式で用いられた表現などを記録した。本論文で提示する例文はいずれもこうした調査で得られた句や、文中にビスラマ語の借用語彙を含むものである。さらに自然発話で得られなかった句や文に関しては、作例したビスラマ語の文をツツバ島で生まれ育った70歳以上の話者(総数7名)にツツバ語に訳してもらい、その容認度を調べた。

### 2. ツツバ語とビスラマ語の色彩用語

先行研究<sup>3)</sup>で報告されたツツバ語の五つの色彩用語は[mamaeto] “black”, [esa] “green”, [memea] “red”, [vuso] “white”, [maŋoa] “yellow”である。しかしその後の調査によって、これらの単語を主語代名詞接語と語基に分けると、ma=maeto, me=esa, me=nmea, mo=vuso, ma=aŋoaとなることが判明した<sup>5)</sup>。ゆえに本論文では5色を順にmaeto, esa, nmea, vuso, aŋoaと記す。なお先行研究<sup>3)</sup>で[memea] “red”と記される語は、主語代名

詞接語の直後に鼻音閉鎖音[n]を伴うことから、主要部はnmeaであると考えられる。

一方ビスラマ語の色彩用語はツツバ語よりも多岐にわたり、blak「黒い」、red「赤い」、yellow「黄色い」、blu「青い」、grin「緑色の」、braon「茶色い」、waet「白い」などが使用頻度の高い語彙項目として挙げられる。こうした色彩用語の多様性は、ビスラマ語が英語をベースとするピジン・クレオールであることに由来すると考えられる。上記ツツバ語とビスラマ語の色彩用語の意味体系を比較すると、両言語の各々の単語がカバーする意味範囲に違いがあることは明らかである。

### 3. 二言語話者の言語使用と語彙借用

ツツバ語とビスラマ語の二言語を自由に運用できる話者がツツバ語で会話をする際、ビスラマ語から単語を借用することがある。色彩分野は、そうした借用が頻繁に起こる意味領域の一つである。

先述した両言語の単語の意味範囲から分かるように、ツツバ語の色彩用語数はビスラマ語よりも少なく、結果としてツツバ語では一語が包括する色彩の領域がビスラマ語よりも広くなる。例えばビスラマ語においてgrin「緑色の」と表現される色もblu「青い」と表現される色も、ツツバ語ではesa「緑色の」が包括する色彩の領域に含まれる。

ツツバ語話者同士が会話をする場合には、通常は例文(1)のように双方の母語であるツツバ語が使用される。色彩を表す際にはツツバ語の5色が用いられるが、しかし話者が色をさらに特定して細かく伝える場合には、茶や青などのツツバ語にはない語彙項目がビスラマ語から借用されることがある。このとき、借用されたビスラマ語の色彩用語は、ツツバ語の色彩用語が生起すべき位置にツツバ語の用語に代わって挿入される(2)。この文ではbraonがビスラマ語である。

(1) viriu bula-ku                    ma=maeto. ve=te=vuso.  
犬    CLASS-1SG.POSS 3SG.R=黒い 3SG.R=NEG=白い  
「私の飼っている犬は黒です。白ではありません」

(2) viriu bula-ku                    ma=maeto. me=te=braon.  
犬    CLASS-1SG.POSS 3SG.R=黒い 3SG.R=NEG=茶色い  
「私が飼っている犬は黒です。茶色ではありません」

ただし、ツツバ語の色彩用語に代わってビスラマ語の色彩用語を用いることが常に許容されるわけではない。許容される句や文がある一方で、非文とされる句や文が存在する。そうした差異は何に依拠し、どのような借用上の制約があるのか。以下は両言語の色彩用語が生起する位置とその文法機能・音連続などを比較・分析した結

果、明らかになった借用上の制約である。

## 結果・考察

形容詞の最も基本的な機能は名詞を修飾することである。ツツバ語の色彩用語はいずれもこれを主たる機能とすることから、形容詞に分類できる。ビスラマ語の色彩用語もまた同様に名詞修飾を主とし、形容詞に分類される<sup>10), 11)</sup>。

ツツバ語の形容詞は、名詞修飾の働きに加え、述部の主要部として生起する機能も有する。また接辞の付加により名詞として生起する機能もあり、多様な働きをする<sup>5)</sup>。以下に挙げるのはツツバ語で形容詞に分類される語彙項目が共通して有する5つの機能である。

- 1) 単独で名詞を修飾する
- 2) 他の品詞と共起してともに名詞句主要部を修飾する
- 3) 名詞を修飾し、名詞に代わって接辞が付与される
- 4) 接辞の付加を伴わずに単独で名詞として生起する
- 5) 動詞句主要部の述語として生起する

ビスラマ語がこれらの機能のいずれを満たしてツツバ語に借用され、またいずれを満たせないがゆえに借用されないのか、両言語の比較と分析の結果は以下の通りである。

### 1. 色彩を表す形容詞が単独で名詞を修飾する場合

ツツバ語とビスラマ語では色彩用語がともに形容詞に分類され、名詞を修飾するという主たる働きを担う。ただし例文(3), (4)のようにツツバ語では名詞の直後にそれを修飾する形容詞が生起するのに対し、ビスラマ語では名詞の直前に形容詞が生起するという統語上の違いがある(5), (6)。

- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| (3) vira vuso<br>花 白い<br>「白い花」  | (4) viriu maeto<br>犬 黒い<br>「黒い犬」 |
| (5) waet flawa<br>白い 花<br>「白い花」 | (6) blak dog<br>黒い 犬<br>「黒い犬」    |

このようにビスラマ語とツツバ語では、名詞と形容詞の生起する語順が真逆である。しかしながらツツバ語話者の会話では「ピンク色の花」、「茶色い犬」など、ビスラマ語の形容詞を借用したツツバ語の句や文が使用されることがある(7), (8)。使用される文脈としては、例えば「どの犬?」に対し、話者が犬の色をより細かく特定しよ

うとする場合が多い。これらの借用例は、名詞と形容詞の語順の違いがビスラマ語を借用する上での制約とはならないことを示唆している。

- |                                      |                                    |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| (7) vira pink<br>花 ピンク色の<br>「ピンク色の花」 | (8) viriu braon<br>犬 茶色い<br>「茶色い犬」 |
|--------------------------------------|------------------------------------|

### 2. 形容詞が他の品詞と共起してともに名詞句主要部を修飾する場合

ツツバ語では名詞句主要部が自由名詞であるとき、名詞句主要部を修飾することが可能な品詞は形容詞、冠詞、普通名詞(または固有名詞)、指示代名詞、数詞(または数量詞)、類別詞+所有者代名詞接辞(または類別詞+連結辞+名詞句)、そして関係節である。関係節を除き、これらの語を最大数共起させると、以下の語順で名詞句が形成される。

【冠詞 主要部 主要部を修飾する普通名詞 形容詞 指示代名詞 数量詞 類別詞+連結辞+名詞句】 NP

- (9) ka=an [te toa vavine lavao l  
1SG.IR= 食べる ART 鶏 女性 大きい DX  
tarina bula-n Vernabas.] NP  
たくさん CLASS-LINK Vernabas  
「私はヴァナバスが飼っているあれらの大きな雌鶏を  
たくさん食べたい」

以下は色彩の形容詞に加えて複数の構成要素を伴う、ツツバ語の名詞句である。

- (10) nno=vaŋara [viriu vavine vuso e-tea.] NP  
1SG.R= 餌をやる 犬 女性 白い CDN-1  
「私は一匹の白い雌犬に餌をやった」

同じ意味のビスラマ語の文は(11)のようになる。両言語の名詞句の構造を比較すると、ツツバ語が[名詞句主要部 主要部を修飾する普通名詞 形容詞 数詞]の語順で生起するのに対し、ビスラマ語では逆に[数詞 形容詞 主要部を修飾する普通名詞 名詞句主要部]の語順であることが分かる。

- (11) mi fidim [wan waet woman dog.] NP  
1SG 餌をやる 1 白い 女性 犬

形容詞が名詞句主要部を修飾する他の品詞と共起する時、ビスラマ語の形容詞をツツバ語の形容詞に代わり用いることは可能であろうか。ビスラマ語から借用された形容詞が、ツツバ語のどの位置に生起するかを示す文が

以下になる。

- (12) nno=vaŋara [viriu vavine braon e-tea.] NP  
ISG.R=餌をやる 犬 女性 茶色い CDN-1  
「私は一匹の茶色い雌犬に餌をやった」

ツツバ語とビスラマ語では、名詞とそれを修飾する形容詞が逆の語順で生起するにも関わらず、ビスラマ語からの形容詞の借用がツツバ語で許容されることは先の1. 「色彩を表す形容詞が単独で名詞を修飾する場合」で示した通りである。これと同様に上記の例(12)は、名詞句主要部の修飾要素が形容詞以外に複数ある場合においてもまた、両言語の名詞句内の語順の違いが借用上の制約とはならないことを示している。

### 3. 色彩を表す形容詞が名詞を修飾し、接辞が付与される場合

ツツバ語には、自由名詞に付加して当該名詞が既に言及されたものであることを示す前方照応の接尾辞 -i/-de がある。-i と -de は相補分布し、それぞれ指示代名詞 nei 「その」や nede 「この」から派生したと考えられる。名詞句主要部と前方照応の接尾辞には、語基末が中・低母音のときは接尾辞 -i が付加されて狭めが生じ、子音またはそれ以上に狭めることができない高母音 i, u のときには接尾辞 -de が付加されるという音韻上の規則がある。そして接尾辞 -i/-de が付加される時、名詞のアクセント位置は一音節分後退する。これはツツバ語が語末から二音節目の母音にアクセントが置かれる言語であることに起因する。

- |                                     |                                   |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| (13) ima-i<br>家-REF<br>「その家」        | (14) tanume-i<br>悪魔-REF<br>「その悪魔」 |
| (15) arivi-de<br>ねずみ-REF<br>「そのねずみ」 | (16) utu-de<br>虱-REF<br>「その虱」     |

通常、前方照応の接尾辞は名詞に付加されるが、名詞句主要部を修飾する名詞・冠詞・形容詞が共起して名詞句末に現れる時には、前方照応の接尾辞は形容詞に付加する。その場合の名詞句を以下に示す。

【(主要部) (主要部修飾名詞) (形容詞 -i/-de)】 NP

- (17) tamoloi mera dui-de me=reti-reti bal...  
人 男 良い-REF 3SG.R=RED-言う このように  
「その親切な男性は次のように言いました…」

ツツバ語の前方照応の接尾辞がビスラマ語から借用した

語に付加された例は、これまでにビスラマ語の bag/bak 「バッグ」の一例しか得られていない。この語は借用される際、既出であれば baki-de と表される。bak が baki となる理由は、ツツバ語では CV が最も基本的な音節であることから、尾子音 k の調音位置である軟口蓋と最も調音位置に近い母音 i を、k に後続させたことによると説明できる。

- (18) erua-ku me=vere na baki-de.  
友人-1SG.POSS 3SG.R=作る ART バッグ-REF  
「私の友人がそのバッグを作った」

ビスラマ語は接辞の付与がない言語である。ツツバ語では名詞が既出であることが接尾辞 -i/-de により示されるが、ビスラマ語では ia 「ここ」を使って表される。以下は(18)の文をビスラマ語にしたものである。

- (19) fren blong mi i mekem bag ia.  
友人 POSS ISG PM 作る バッグ DX

上記ツツバ語、ビスラマ語のそれぞれの文に、「白い」を意味する形容詞を加えて作例すると次のようになる。

- ツツバ語 (20)  
erua-ku me=vere na baki vuso-i.  
友人-1SG.POSS 3SG.R=作る ART バッグ 白い-REF  
「私の友人がその白いバッグを作った」

- ビスラマ語 (21)  
fren blong mi i mekem waet bag ia.  
友人 POSS ISG PM 作る 白い バッグ DX

上記ツツバ語の文(20)の vuso 「白い」に代わり、ビスラマ語の形容詞 braon 「茶色い」を加えて作例すると以下の文になる。しかしながらこの文は7人の話者全員に容認されなかった。

- \*(22) erua-ku me=vere na baki braon-i.  
友人-1SG.POSS 3SG.R=作る ART バッグ 茶色い-REF  
「私の友人がその茶色いバッグを作った」

また、ツツバ語は CV を基本音節とするため、尾子音が母音である blu 「青い」を借用した文を作例したが、この文もまた7人全員に許容されなかった。

- \*(23) erua-ku me=vere na baki blu-de.  
友人-1SG.POSS 3SG.R=作る ART バッグ 青い-REF  
「私の友人がその青いバッグを作った」

ビスラマ語の色彩の形容詞をツツバ語に借用して作例した\*(22), \*(23)が非文であるという結果は、それぞれ以下の二点を示唆している。

- ビスラマ語の名詞がツツバ語の文中で借用される場合には、ツツバ語の前方照応の接尾辞が付加される。この前方照応の接尾辞は、名詞が形容詞に修飾される場合には名詞ではなく形容詞に付加されるというツツバ語の規則があるが、形容詞がビスラマ語からの借用語である場合には、形容詞への接尾辞の付与は認められない。
- 借用語への前方照応の接尾辞の付加は、語末の音節が開音節であるか閉音節であるかの違いには依拠していない。すなわちビスラマ語とツツバ語の音連続は借用上の制約にはなっていない。

#### 4. 色彩を表す形容詞が名詞として生起する場合

先の3.「色彩を表す形容詞が名詞を修飾し、接辞が付与される場合」では、本来ならば名詞に付加される接辞が、名詞ではなく名詞を修飾する形容詞に付与される際の語彙借用について考察した。今度は形容詞が名詞として生起する機能に焦点をあて、この時に語彙借用が可能であるか否かについて考察する。

ツツバ語では形容詞に接頭辞 no- が付加されると名詞が派生する。

(24) no-vuso                      mo=dui.  
NMLZ- 白い                      3SG.R= 良い  
「白いのは良い」

一方、ビスラマ語に接辞は存在せず、形容詞が名詞としてふるまうことも可能である。上記(24)の形容詞に代わり、ビスラマ語の色彩用語を用いると以下ようになる。ただし借用したビスラマ語の形容詞に名詞派生の接頭辞を付加させた文\*(25)の容認度は、言語習得途中の子供であればこうした間違いをする可能性もあるが、大人がこうした発話をするのではなく、これは非文であるという結果となった。

\*(25) no-waet                      mo=dui.  
NMLZ- 白い                      3SG.R= 良い  
「白いのは良い」

さらにツツバ語では名詞が既出名詞であれば、以下のようにこれに前方照応の接尾辞-iが付加される(26)。時に接尾辞-iが付加されるだけで形容詞が名詞的に用いられることがあるが、これは接尾辞-iが既出名詞を示すという本来の機能に加え、形容詞に付加する場合には名詞標識としても作用するからであると考えられる(27)。

(26) no-vuso-i                      ma=an                      ma=lavoa.  
NMLZ- 白い-REF                      3SG.R= 食べる                      3SG.R= 大きい  
「その白いやつはよく食べる」

(27) vuso-i                      ma=an                      ma=lavoa.  
白い-REF                      3SG.R= 食べる                      3SG.R= 大きい  
「その白いやつはよく食べる」

上記二文(26)と(27)の形容詞に代わり、ビスラマ語の形容詞を用いると以下の二文のようになる。しかしビスラマ語の形容詞に名詞派生接頭辞と前方照応の接尾辞が付与された\*(28)とビスラマ語の形容詞に前方照応の接尾辞が付加されて名詞化した\*(29)もまた、\*(25)と同様に許容されなかった。

\*(28) no-braon-i                      ma=an                      ma=lavoa.  
NMLZ- 茶色い-REF                      3SG.R= 食べる                      3SG.R= 大きい  
「その茶色いやつはよく食べる」

\*(29) braon-i                      ma=an                      ma=lavoa.  
茶色い-REF                      3SG.R= 食べる                      3SG.R= 大きい  
「その茶色いやつはよく食べる」

\*(25), \*(28), \*(29)のそれぞれの結果により、借用したビスラマ語の形容詞に対する①「ツツバ語の名詞派生接辞の付与」、②「名詞派生接辞の付与と前方照応の接辞付与」、③「前方照応の接辞付与による名詞化というツツバ語の規則の適用」のいずれもが不可であることが明らかになった。

#### 5. 色彩を表す形容詞が動詞句主要部の述語として生起する場合

多くのオセアニアの言語がそうであるように、ツツバ語の形容詞はいずれも主語代名詞に先行されて、述部の主要部として機能する(30)。このとき、形容詞を述語とする形容詞述語文は主語の状態を表す。

(30) vila leŋ                      mo=vuso.  
花                      DX                      3SG.R= 白い  
「あの花は白い」

ビスラマ語の形容詞もツツバ語と同様に述語として生起することが可能である。このとき形容詞の前には、常に述部の直前に生起して述部マーカースとしての役割を果たすiが現れる(31)。また否定の文では、述部マーカースのiの直後に否定をあらわすnoが置かれる(32)。

(31) flawa longwe i waet.  
花 DX PM 白い  
「あの花は白い」

(32) flawa longwe i no waet.  
花 DX PM NEG 白い  
「あの花は白くない」

ビスラマ語の形容詞を、述語として生起するツツバ語の形容詞に代わって用いた文が以下の\*(33)と\*(34)である。作例したこの2つの文章は7人の話者により非文とされたが、しかし一方で主語代名詞と述語の間に否定の接語te=を加えた否定文は、自然発話中にも数多くみられ、話者からも容認された(35), (36)。

\*(33) vira leŋ me=pink.  
花 DX 3SG.R=ピンク色の  
「あの花はピンク色だ」

\*(34) viriu leŋ ma=braon.  
犬 DX 3SG.R=茶色い  
「あの犬は茶色だ」

(35) vira leŋ me=te=pink.  
花 DX 3SG.R=NEG=ピンク色の  
「あの花はピンク色ではない」

(36) viriu leŋ me=te=braon.  
犬 DX 3SG.R=NEG=茶色い  
「あの犬は茶色ではない」

肯定文が容認されないのに対し、否定文が容認されるのはなぜであろうか。ツツバ語では動詞の直前に主語の人称・数・法が一つの形態素に融合した主語代名詞が義務的に先行する。主語が三人称・単数である場合の主語代名詞はmV=(Vは母音)であり、この母音は後続する動詞の第一音節母音が高母音iであれば中母音e、高母音uであれば中母音oとなる。また動詞の第一音節母音が中母音・低母音であればこれと同一の母音が現れる。よって肯定文では主語代名詞mV=のVが、述語として生起する形容詞の第一母音を反映してe, a, oのいずれかになる。さらにこの言語の動詞に関する文法範疇には相(アスペクト)、否定、義務性があり、それぞれの意味を担う小詞が主語代名詞と動詞の間に置かれる。否定文では接語te=が挿入されることにより主語代名詞mV=のVが常にeとなる。すなわち述語に生起する語彙項目がツツバ語であろうと借用したビスラマ語の語彙であろうと、それに関わりなく、mV=のVはeとなり、語彙借用の影響が生じ

ない。一方、否定の接語te=が挿入されない肯定文では、主語代名詞の母音を述語の第一音節母音と調和させねばならず、話者の意識は述語に向けられる。ゆえに述語がツツバ語ではなくビスラマ語である場合は不自然さが生じ、これが容認度の違いに反映されたと説明できる。

## 結 論

色彩の形容詞をビスラマ語からツツバ語に借用するにあたり、以下の複数の制約が存在することが明らかになった。

1. ビスラマ語の色彩の形容詞をツツバ語文中の形容詞位置に借用する際、両言語の語順の違いは借用上の制約とはならない。そしてそれは名詞句内に他の主要部要素が複数生起する際も変わらない。
2. 名詞を修飾する形容詞に前方照応の接尾辞が付加される文脈においては、ビスラマ語の色彩の形容詞の借用は許容されない。ただしビスラマ語の名詞が借用される場合には接尾辞の付加が認められ、またツツバ語では形容詞に前方照応の接尾辞が付加されうることから、この制約は、ビスラマ語の形容詞とツツバ語の前方照応の接尾辞間のものであると分かる。さらに前方照応の接尾辞は本来ツツバ語名詞に付加することから、付加の許容度は「ツツバ語名詞>ツツバ語形容詞≥ビスラマ語からの借用名詞>ビスラマ語からの借用形容詞(許容不可)」の順であることが分かる。なおこの制約は、借用した形容詞の尾子音と前方照応の接尾辞の音連続によるものではない。上記に加え、借用したビスラマ語の形容詞にツツバ語の接辞を付加させて名詞を派生させることも認められないことから、形容詞に接辞を付加させることに対する制約が存在していることが分かる。
3. ビスラマ語の色彩の形容詞が借用されてツツバ語の述部主要部として生起するとき、この肯定文は許容されないが、否定文の場合は許容される。これは肯定文では主語代名詞mV=の母音Vが述語主要部の第一音節母音と調和しなければならないのに対し、否定文では否定の接語te=が挿入されることにより、主語代名詞mV=の母音Vが後続の接語te=の母音と調和して常にeとなることに起因すると考えられる。つまり述語であるビスラマ語の形容詞がツツバ語の主語代名詞にかける音韻的・形態的負担が肯定文と比べて低いためであると説明できる。



## 引用文献

- 1) Clark R (1985): Languages of North and Central Vanuatu: Groups, chains, clusters and waves. In: Austronesian Linguistics at the 15th Pacific Science Congress. Pawley A and Carrington L (eds), p.199-236, Pacific Linguistics
- 2) Lynch J, Ross M, Crowley T (2002): The Oceanic Languages. Routledge
- 3) Tryon DT (1976): New Hebrides Languages: An Internal Classification. Pacific Linguistics
- 4) Lynch J, Crowley T (2001): Languages of Vanuatu: A New Survey and Bibliography. Pacific Linguistics
- 5) 内藤真帆(2011):「ツツバ語 記述言語学的研究」. 京都大学学術出版会
- 6) Early R (1993): Nuclear layer serialization in Lewo. Oceanic Linguistics, 32, (1), 65-94.
- 7) François A (2002): Araki: A Disappearing Language of Vanuatu. Pacific Linguistics
- 8) Guérin V (2011): A Grammar of Mavea: An Oceanic Language of Vanuatu, University of Hawai'i Press
- 9) Crowley T (1995): A New Bislama Dictionary. The University of the South Pacific
- 10) Crowley T (2003): A New Bislama Dictionary, 2nd edition. The University of the South Pacific
- 11) Crowley T (2004): Bislama Reference Grammar. University of Hawai'i Press

## 脚注

本論文で扱う略号は以下の通りである。1・2・3一人称・二人称・三人称, ART冠詞, C子音, CDN基数, CLASS分類辞, DX指示代名詞, IR未然法, LINK連結辞, NEG否定, NMLZ名詞化派生接辞, NP名詞句, PM述語標識, POSS所有者接辞, PP前置詞, R既然法, RED重複, REF前方照応接辞, SG単数, V母音, -接辞, =接語境界, \*非文

## 要旨

南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国では100余りの現地語が話されており、国民の多くは国語ビスラマ語に加えて、現地語の少なくとも一つを話すことができる。本論文ではビスラマ語と現地語の一つであるツツバ語に焦点をあて、色彩に関する語彙体系の比較により両言語の意味範囲が異なることをはじめに明らかにする。続いてビスラマ語の色彩用語がツツバ語に借用される場合とされない場合があることに着目し、それが何に依拠するの

かを色彩用語の機能の観点から分析する。そして①両言語の語順の違いは借用上の制約とはならないこと、②ビスラマ語の形容詞にツツバ語の前方照応接尾辞の付加は許容されず、このような文脈においてはビスラマ語の色彩の形容詞の借用が認められないこと、③ビスラマ語とツツバ語の音連続は借用上の制約にはならないこと、④ビスラマ語の形容詞が述部主要部として生起することは否定文においてのみ許容され、これは否定の接語te=の挿入によりビスラマ語がツツバ語の主語代名詞にかける音韻的・形態的負担が抑えられるためであること、この4点を示す。

## 謝辞

数多くのツツバ語話者の協力により、これらのデータを得ることが出来た。なかでも参与観察と聞き取り調査に積極的に協力して下さったVernabas首長、Eileen氏、Sara氏、Turabue氏、John氏、Delvin氏、Eles氏に深く感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費JP16H07139の助成を受けたものです。

## 利益相反

なし